

2021 年度八戸学院大学短期大学部「学修成果の把握」調査報告

2022 年 9 月 22 日

IR・EM 委員会

1. 概要

本学幼児保育学科の学生は保育士資格および幼稚園教諭二種免許状、介護福祉学科の学生は介護福祉士資格の取得を目指して入学する。学生の日頃の学習の成果は、定期試験やそれに基づく GPA、実習評価等によって測定され、また、学修成果を示すパフォーマンスもさまざまな機会に披露される。それとは別に、彼らの在学中の成長をより包括的な視点で把握するため、「学修成果の把握」調査を企画し 2020 年度より実施してきている。

調査の目的は学生自身の成長実感を把握し、ディプロマポリシーを検証すること、また、結果を授業やカリキュラム等の教育活動の見直しに繋げることである。本調査報告には、2020 年度生の 2 年間の変遷（第 4 回までの調査）、2021 年度生（第 2 回までの調査）が示されている。

2. 方法

(1)調査項目の作成

2020 年度に、各学科において学科長を中心としたプロジェクトチームを編成し、そこで学科のディプロマポリシーを基に評価の観点となる項目を作成した。評価のレベルは 4 段階（「入学時を想定した第 1 段階」から、「卒業時に達していることが望まし第 4 段階」まで）とし、各段階の評価基準を分かりやすい短文で表現するよう、それぞれの観点の主たる担当教員に依頼した。作成の過程で観点の見直しを行い、評価基準となる文言はチームのメンバーが最終的に推敲した。結果として、両学科とも評価の観点は 17 項目となった。2021 年度に、両学科とも調査項目の改善に取り組み、その内容は各学科のページに記載している。

(2)調査の実施

評価方法は自己評価とし、グーグルフォームを用いて 2021 年度後期の試験期間に全学生を対象に実施した。

3. 幼児保育学科について

(1)結果の概要

幼児保育学科のディプロマポリシーは表1の通りである。

表1 幼児保育学科のディプロマポリシー

1. 健全で豊かな情操と、保育の基盤となる教養や総合的な判断力を身につけている。 2. 保育の専門的知識と技術を有し、子どもの発達過程に応じて豊かな保育環境を構成することができる。 3. 保育者としての責務を理解し、他の保育者や専門職者と協働して、子どもの最善の利益を追求することができる。

2020年度入学生の評価の観点のうち、①～④がポリシーの1、⑤～⑬がポリシーの2、⑭と⑮がポリシーの3に対応している。評価の観点、各項目の評価基準、2020年度生の4回に渡る調査の結果を6～10ページに示す。

また、2021年度入学生の評価の観点のうち、①～④がポリシーの1、⑤～⑭がポリシーの2、⑮から⑰がポリシーの3に対応している。その結果を11～15ページに示している。

スマートフォンのトラブル等で2名の学生が回答できなかったため、回収率は99%（回答者は1年生87人、2年生97人）、有効回答率は99%であった。

(2) カイ二乗検定の結果（表2）

1) 2021年度生の結果

2021年度生の1年次前期と1年次後期の結果において有意差が認められたのは、

- | |
|--|
| ②対人的情操 ($\chi^2(3)=6.08, p=0.107$) ⑤保育 ($\chi^2(3)=8.162, p=0.042$)
⑥福祉・養護 ($\chi^2(3)=8.95, p=0.029$) ⑨子ども理解 ($\chi^2(3)=6.53, p=0.084$)
⑬ピアノ ($\chi^2(3)=6.86, p=0.076$) |
|--|

の計5つの評価の観点（17項目中5項目29%）であった。

2) 2020年度生の結果

2年次の調査である2年次前期と2年次後期において有意差が認められたのは、

- | |
|--|
| ②教養 ($\chi^2(3)=13.19, p=0.004$) ③音楽 ($\chi^2(3)=9.48, p=0.023$)
⑥福祉・養護 ($\chi^2(3)=8.96, p=0.029$) ⑦乳児・保健 ($\chi^2(3)=6.81, p=0.078$)
⑨子ども理解 ($\chi^2(3)=15.01, p=0.001$) ⑩障がい ($\chi^2(3)=17.9, p=0.0005$)
⑪教育実践 ($\chi^2(3)=9.97, p=0.019$) ⑫ピアノ ($\chi^2(3)=6.53, p=0.088$)
⑬美術 ($\chi^2(3)=8.11, p=0.043$) ⑭健康・体育 ($\chi^2(3)=11.24, p=0.01$)
⑯保育者の責務 ($\chi^2(3)=10.32, p=0.016$)
⑰他者との協働 ($\chi^2(3)=10.52, p=0.014$) |
|--|

計 12 の評価の観点（17 項目中 12 項目 70%）であった。

2 年間の最初の調査と最後の調査である 1 年次前期と 2 年次後期において有意差が認められたのは、④の判断・問題解決力（ $\chi^2(3)=5.11, p=0.1630$ ）以外の計 16 項目の評価の観点で（17 項目中 16 項目 94%）であった。

保育①学びへの態度（ $\chi^2(3)=14.32, p=0.002$ ）
②教養（ $\chi^2(3)=11.57, p=0.008$ ） ③音楽（ $\chi^2(3)=11.79, p=0.008$ ）
⑤保育（ $\chi^2(3)=33.04, p=0.000$ ） ⑥福祉・養護（ $\chi^2(3)=27.04, p=0.000$ ）
⑦乳児・保健（ $\chi^2(3)=22.67, p=0.000$ ）
⑧教職の意義・教育理論（ $\chi^2(3)=13.36, p=0.003$ ）
⑨子ども理解（ $\chi^2(3)=11.99, p=0.007$ ） ⑩障がい（ $\chi^2(3)=23.27, p=0.000$ ）
⑪教育実践（ $\chi^2(3)=22.81, p=0.000$ ） ⑫ピアノ（ $\chi^2(3)=32.19, p=0.000$ ）
⑬美術（ $\chi^2(3)=19.16, p=0.000$ ） ⑭健康・体育（ $\chi^2(3)=18.16, p=0.000$ ）
⑮言葉・文学（ $\chi^2(3)=22.61, p=0.000$ ）
⑯保育者の責務（ $\chi^2(3)=16.50, p=0.000$ ）
⑰他者との協働（ $\chi^2(3)=29.67, p=0.000$ ）

表 2 カイ 2 乗検定の結果

	2020 年度生 1 年前期/ 2 年後期	2020 年度生 2 年前期/ 2 年後期		2021 年度生 1 年前期/ 1 年後期
学びへの態度①	**		情操①	
教養②	**	**	対人的情操②	†
音楽③	**	*	学びの態度③	
判断力・課題解決力④			判断力・課題解決力④	
保育⑤	**		保育⑤	*
福祉・養護⑥	**	*	福祉・養護⑥	*
乳児・保健⑦	**	†	乳児・保健⑦	†
教職の意義・教育の理論⑧	**		教職の意義・教育の理論⑧	
子ども理解⑨	**	**	子ども理解⑨	†
障がい⑩	**	**	障がい⑩	
教育実践⑪	**	*	教育実践⑪	
ピアノ⑫	**	†	音楽⑫	
美術⑬	**	*	ピアノ⑬	†
健康・体育⑭	**	*	美術⑭	
言葉・文学⑮	**		健康・体育⑮	
保育者の責務⑯	**	*	言葉・文学⑯	
他者との協働⑰	**	*	保育者の責務⑰	
	** p<.01	* p<.05	† p<.10	他者との協働⑱
				子どもの最善の利益⑲

(2)2020年度生のディプロマポリシーの検証

2年間の本学の教育課程を終えた2020年度生の結果について、3つのディプロマポリシーの観点から検証を行う。

ディプロマポリシーの1に対応する「①学びへの態度」から「④判断力・課題解決力」において、1年次前期と2年次後期の調査では、評価段階1（入学時を想定）の割合が大幅に減少し、すべての観点項目で評価段階3と4（卒業時に達していることが望ましい）の割合が、50%以上となっている（最大値は「④判断力・課題解決力」の66.23%）。

一方、評価段階4の占有率が最も高い観点項目がないところから、とりわけ教養教育の難しさが現れている。しかしながら、学生は保育の基盤となる人間性や教養、総合的な判断力について、学生自身の変化の認識のあることが読み取れる。

ディプロマポリシー2に対応する「⑤保育」から「⑮言葉・文学」の11項目においても1年次前期と2年次後期の調査では、評価段階1の割合が半分以下に減少し、さらに、すべての項目で評価段階の肯定的な推移も確認できる。

一方で、評価段階3及び4の割合の合計が、50%以下となっている項目も見受けられる（「⑤保育：44.15%」「⑥福祉・養護：48.04%」「⑧教職の意義・教育理論：44.15%」「⑩教育実践：48.05%」「⑫ピアノ 37.65%」）。この点については各観点項目の評価段階の規準の質的な差などの影響もあると考えられる。1年次前期の調査における評価段階3及び4の合計割合は、最大値でも「⑨子ども理解」の14.7%のスタートから比較すると、2年間の修学で、多くの学生が子どもの健やかな心身の成長を支える保育者の専門知識・技術の獲得の実感を得ていることが分かる。

ディプロマポリシーの3に対応する「⑯保育者の責務」「⑰他者との協働」において、1年次前期と2年次後期の調査では、評価段階1の割合が大幅に減少し、両項目の評価段階3と4の割合が、63%以上となっている（最大値は⑰他者との協働 70.12%）。さらに「⑰他者との協働」は、評価段階4の占有率36.36%と最も高くなっている。保育者としての職務内容・責任を理解し、他者との協働する力について、学生の成長実感を得ていることが読み取れる。

これらのことから、2年間の学びによりディプロマポリシーの到達が、学生自身の主観的評価から確認でき、幼児保育学科の教育課程の妥当性および効果が読み取れる。

(3)教育活動の見直し

学修成果の獲得について、第1回調査（1年次前期）と第4回調査（2年次前期）を比較すると、全ての評価の観点項目において高い評価基準へと推移し、学生の主観的な成長実感が読み取れる。このことから本学のカリキュラムの中で、学生は自身の成長や変化について実感を得ながら、人としての育ち、専門的な知識・技術の学びを深め、自らの目標に向かう歩みを進められていることが分かる。

この点は、学科として推奨している選択科目も含めて、学生が積極的な履修を行うことで、学びの機会を多く得ていることの影響もあると推察される。

1年次の冬季、2年次の夏季に計画されている保育実習、教育実習があり、保育者の姿、子どもの姿から、座学で得た知識・理論や技術の確認やより学びを深め、成長する機会となっていることもうかがえる。

いっぽうで実習により学生が専門職として求められる力への意識の向上や自分自身を見つめ直す機会となる側面が、一旦、ネガティブな評価への推移からも読み取ることができる。この点からも実習の中での学生の困難な経験、学生の育ちの現在位置について、学科として理解、共有した上で理論と実践を重ね合わせた教育活動の展開を、教員はより意識することが求められる。

また、評価の観点によっては、3及び4（卒業時に達していることが望ましい段階）の占有率が50%に到達していない評価の観点項目、1（入学時を想定した第1段階）に留まっている割合が30%を超えるものも散見されている。

教育課程を担う科目担当者が、学修成果の内容への強い自覚やディープラーニングに結びつくような授業運営の手法の工夫など、より教育改善に向けた取り組みをより進めていく必要があるだろう。

今後、学生の学修成果の主観的評価に加えて、成績評価などの客観的評価の指標も合わせた分析し、その妥当性を検討した上で、学科としての発展に向けた改善を続けていくことが必要であろう。

① 学びへの態度



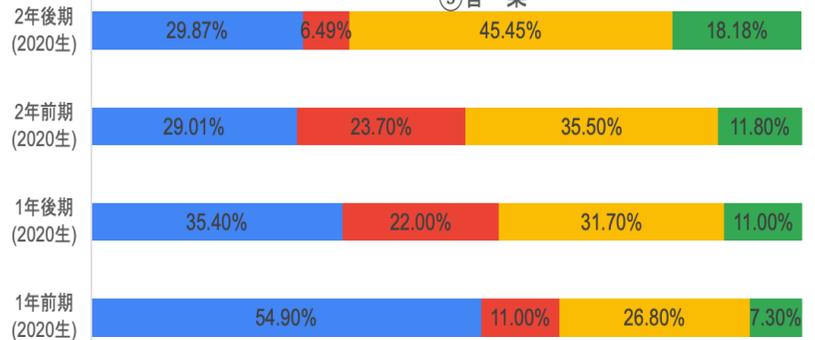
- 保育や幼児教育について学ぼうとする気持ちがある
- 学校や学科のルールを理解し、それらを遵守しながら学びを進めている
- 学科での学びを生かし、社会に貢献しようとする気持ちと、その態度が身についている
- 社会のルールを理解し、そのルールにのっとって行動したり、自己発揮したりすることができる

② 教養



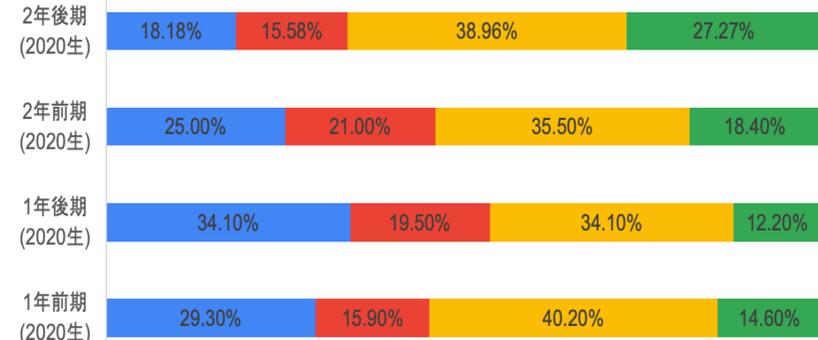
- 様々な分野に渡る知識や経験は少ないが、興味のある分野がある
- 興味のある分野についての知識や経験が得られつつある
- 得意な分野が増え、それ以外にも興味のある分野が広がっている
- 様々な分野に興味があり、それらについての知識や経験を得たり深めたりしている

③ 音楽

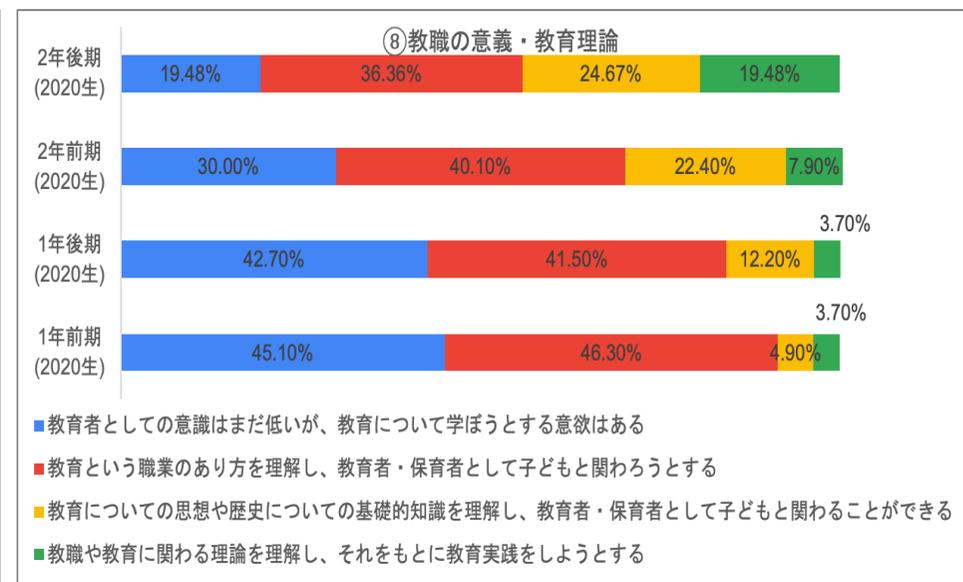
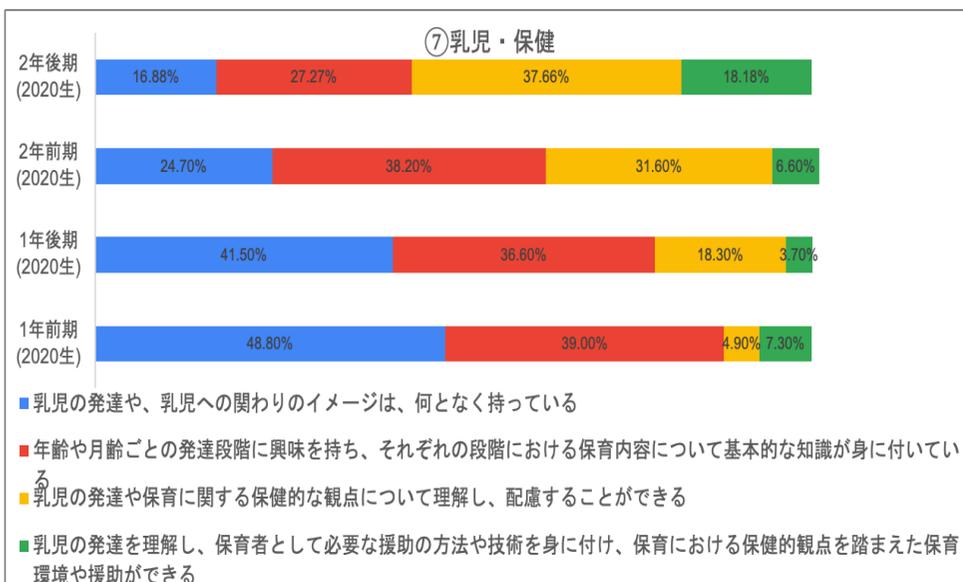
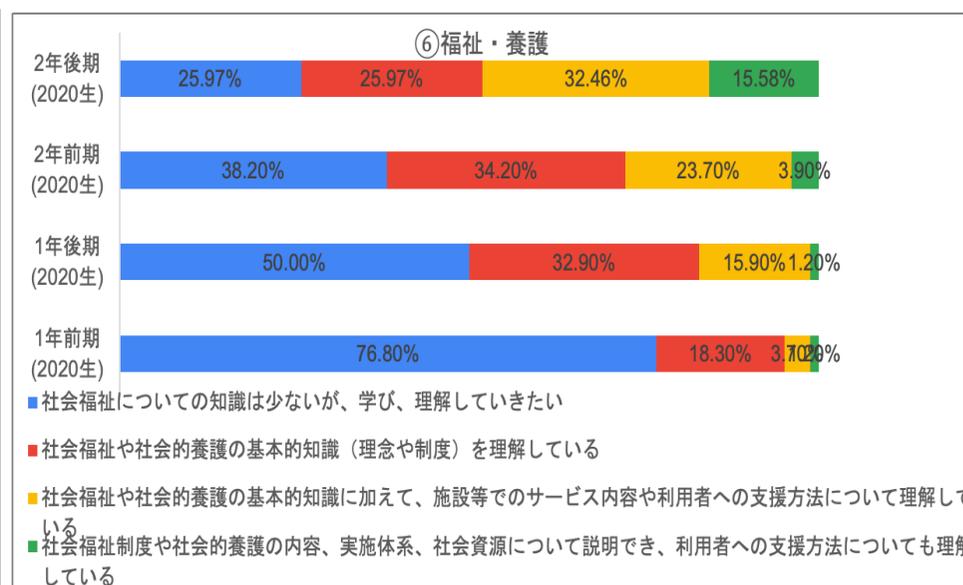
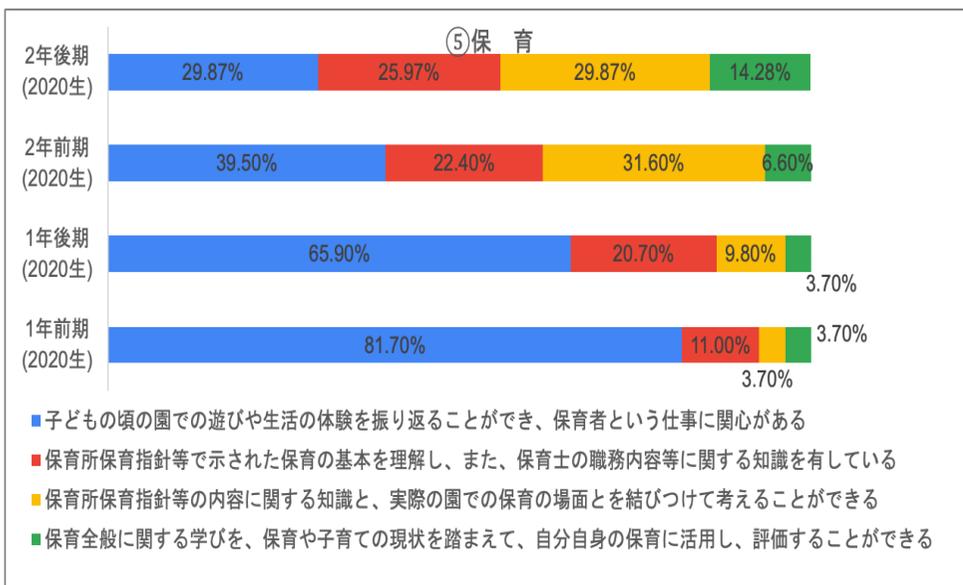


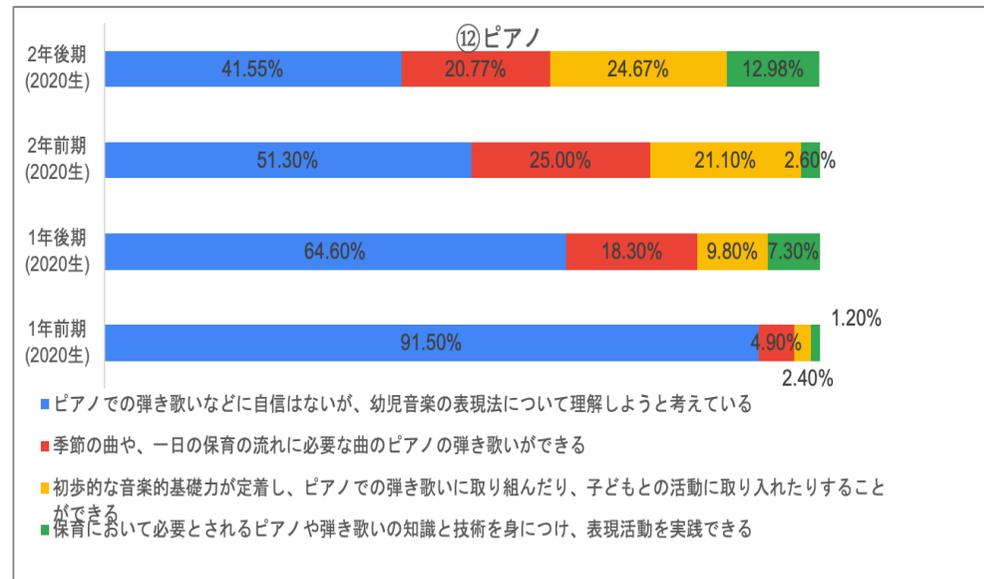
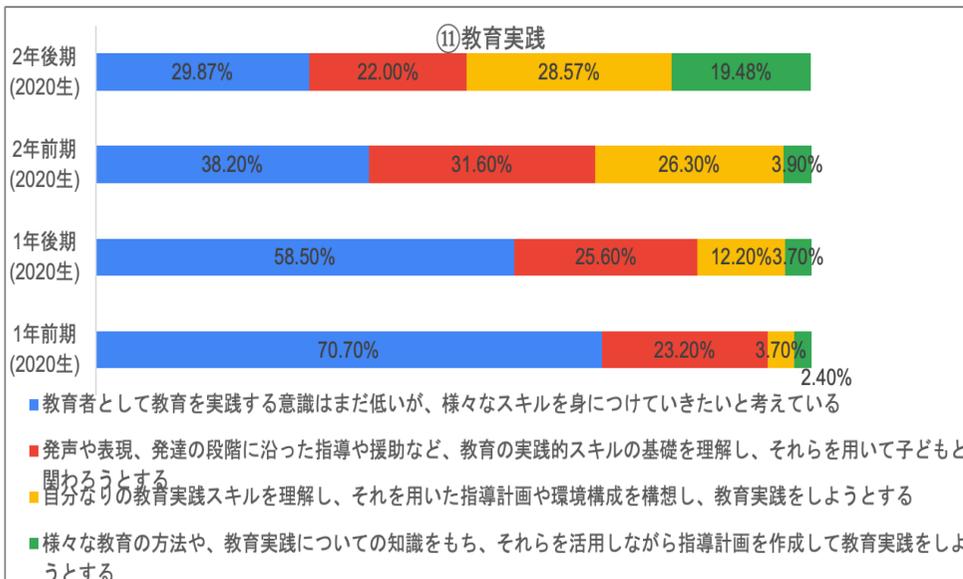
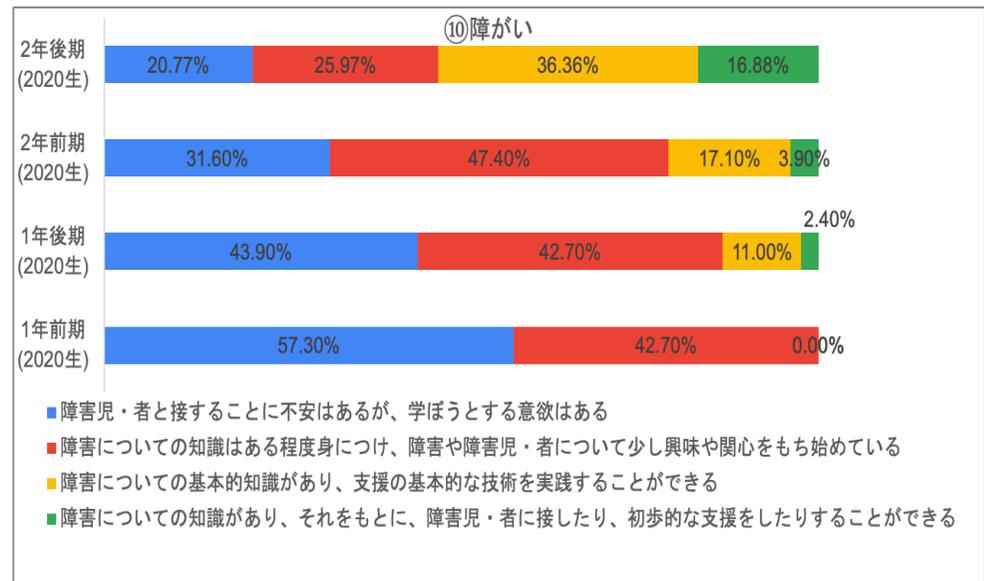
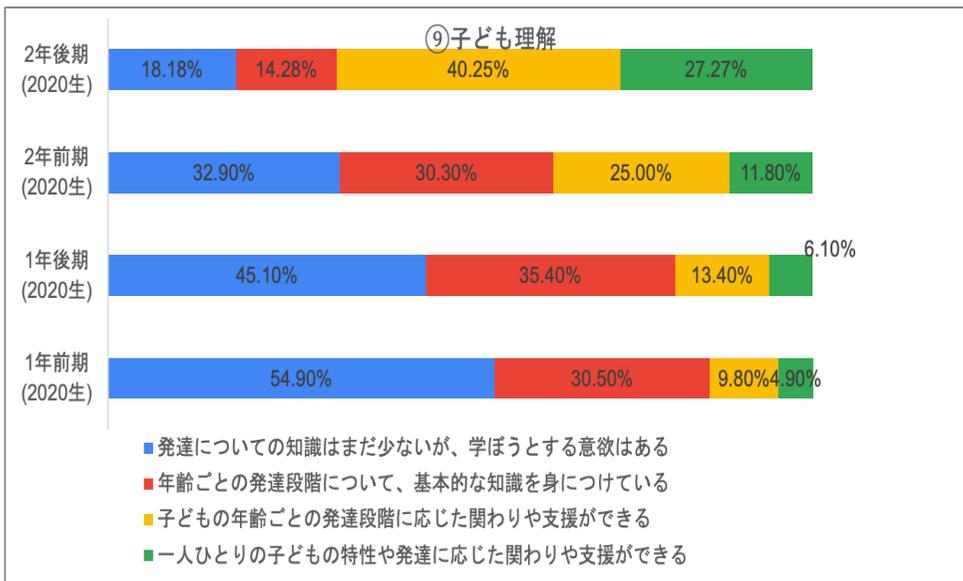
- 音楽に関する知識や技術に自信はないが、学びたいという気持ちはある
- 音楽の基礎的知識を得たり、合唱の基礎を理解したりすることができる
- 音楽の面白さや楽しさを理解し、子どもとの関わりや、保育実践とつなげて考えることができる
- 子どもが音楽の楽しさを実感できる保育や教育を構想し、実践しようとすることができる

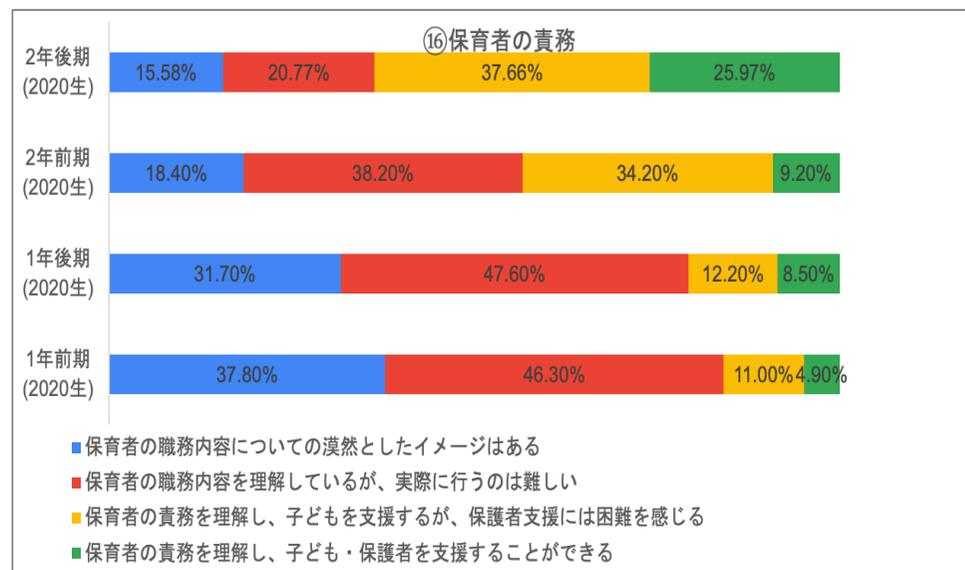
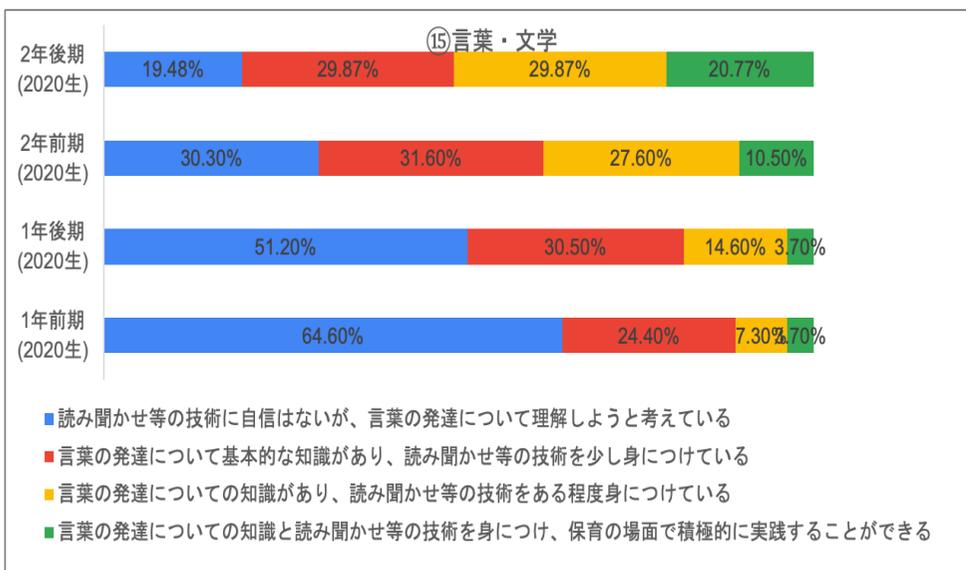
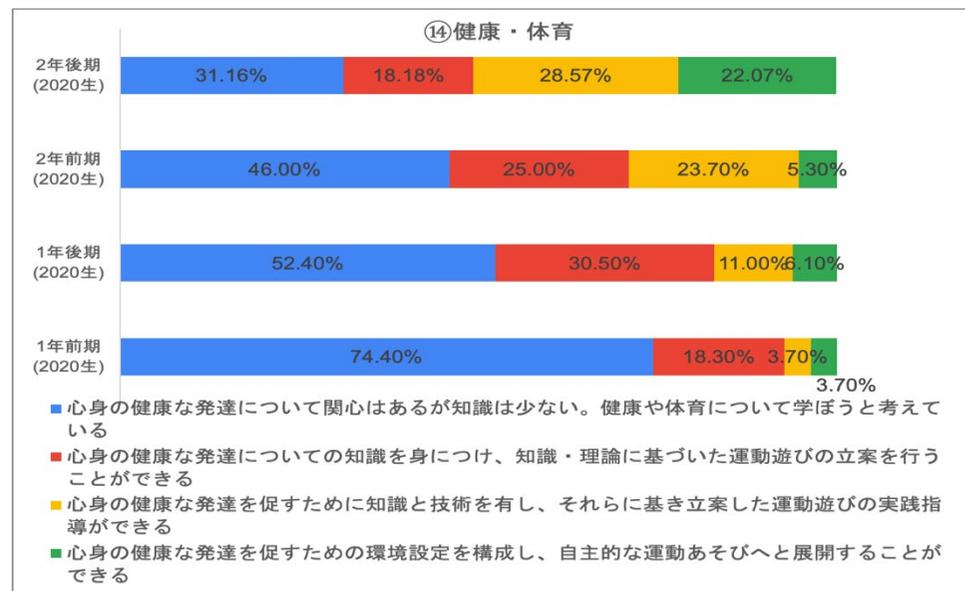
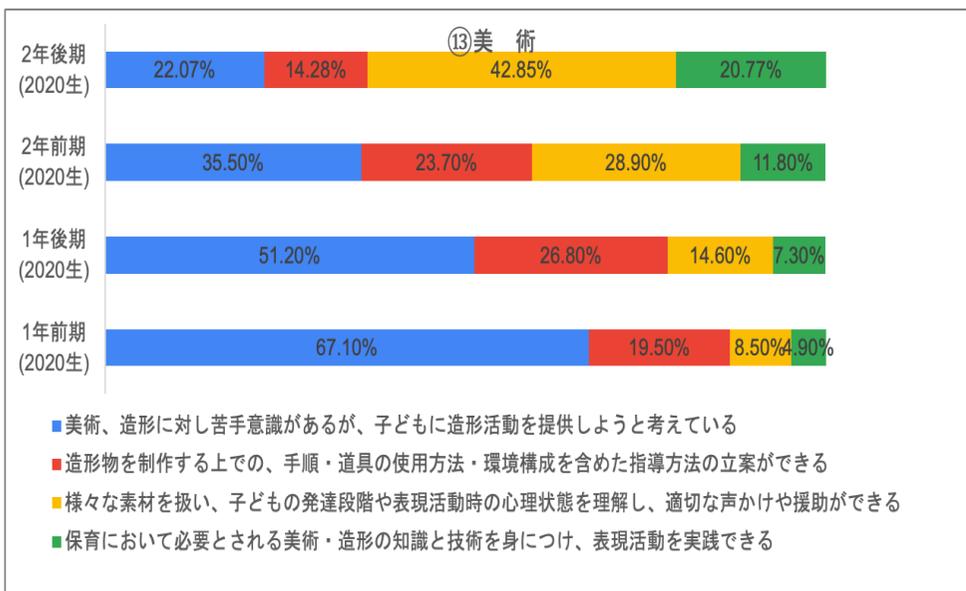
④ 判断力・課題解決力

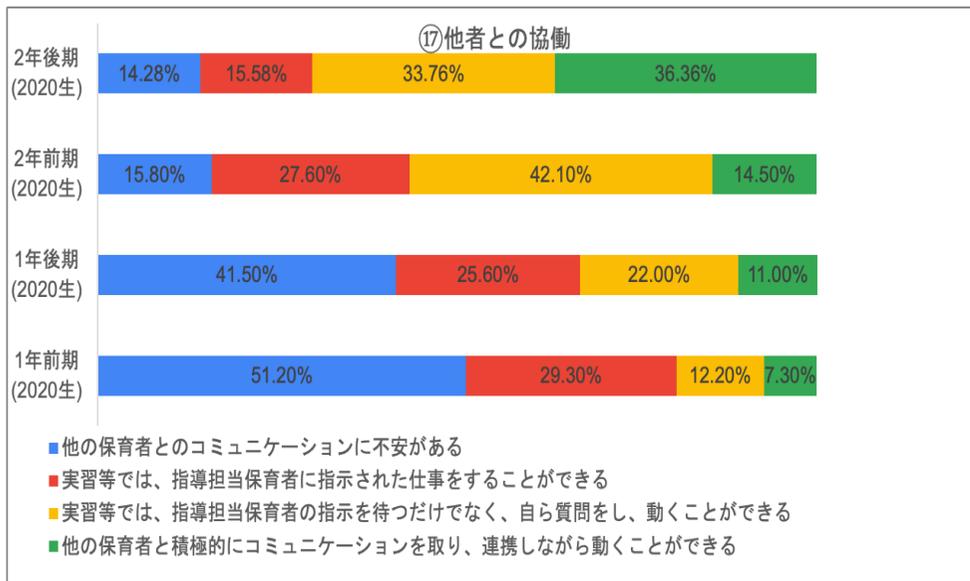


- 通常の場合であれば、自分なりに対処することができる
- 通常の場合には適切に対処できる
- 予期しない事態に出会っても、誰かに相談し、アドバイスを受けて対処することができる
- 予期しない事態に出会っても、相談したり調べたりした結果を基に、自分で考えて対処することができる

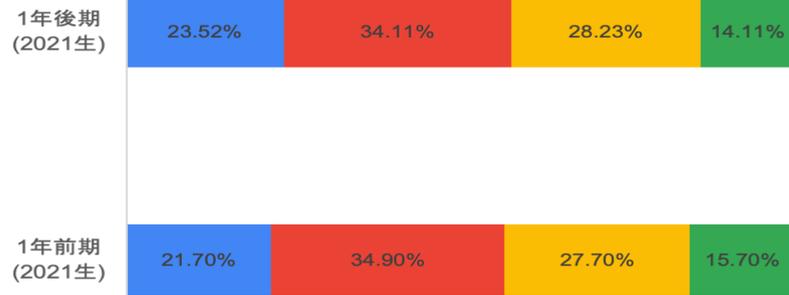






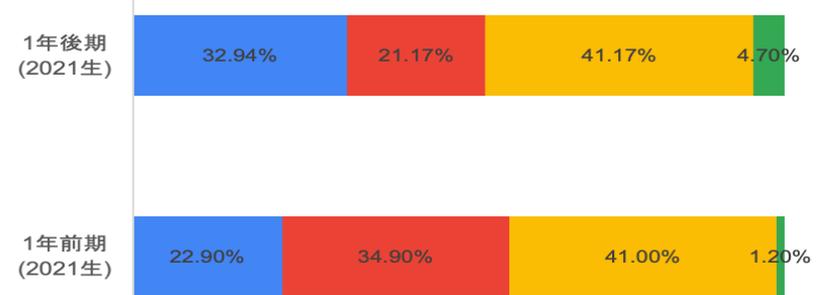


①情操



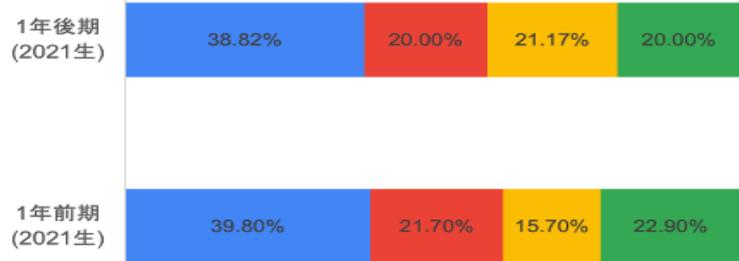
- 文化や芸術に触れようとする気持ちはある
- 文化や芸術に触れ、少しずつ喜びや楽しみを見いだしている
- 文化や芸術から大きな喜びや楽しみを得ている
- 文化や芸術は人生に欠かせないものであり、今後もそれらに触れることで自分を高めていきたい

②対人的情操



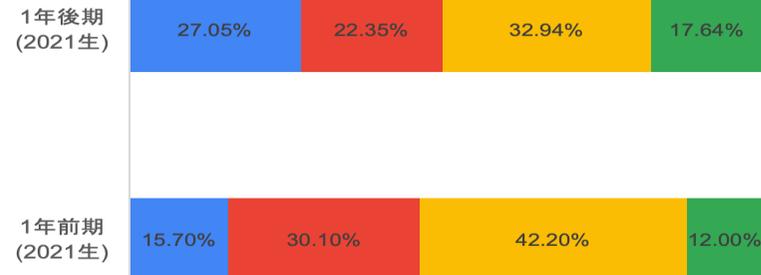
- 対人的情操 家族や友人など身近な人には共感できる
- 対人的情操 身近でない人の感じ方や考え方も共感的に理解し、尊重しようとする気持ちがある
- 対人的情操 年齢や立場の違うさまざまな人と共感しながら交流し、ともに活動することができる
- 対人的情操 「神を敬し、人を愛する」の精神を自分なりに理解し、社会において実践する気持ちがある

③学びへの態度



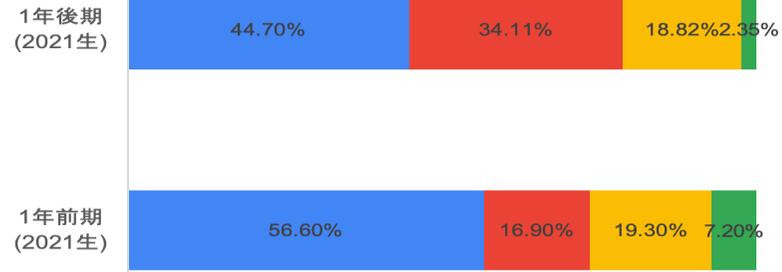
- 保育や幼児教育について学ぼうとする気持ちがある
- 学校や学科のルールを理解し、それらを遵守しながら学びを進めている
- 社会のルールを理解し、それらを遵守しながら学びを進めている
- 社会に貢献していくために、学びを継続しようとする気持ちがある

④判断力・課題解決力



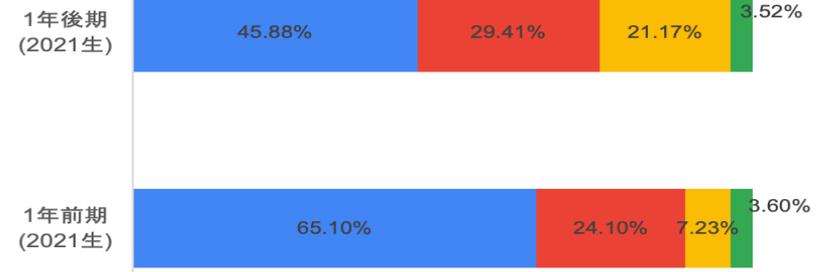
- 課題に出会ったとき、家族や友人に頼ることが多い
- 課題を解決するために、いろいろな人に相談することができる
- 課題を解決するために、人に相談する以外に自分でもよく問題を吟味し、解決方法を検討している
- 困難な事態に出会っても、相談したり調べたりした結果を基に、自分で判断し行動することができる

⑤ 保 育



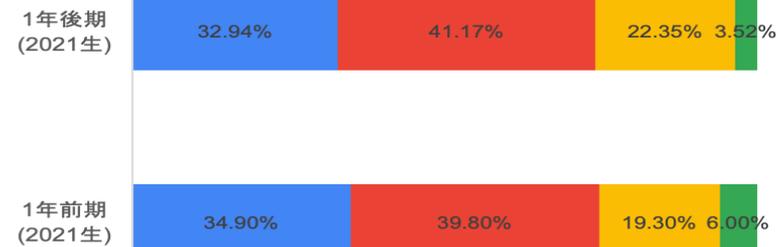
- 子どもの頃の園での遊びや生活の体験を振り返ることができ、保育者という仕事に関心がある
- 保育所保育指針等で示された保育の基本を理解し、また、保育士の職務内容等に関する知識を有している
- 保育所保育指針等の内容に関する知識と、実際の園での保育の場面とを結びつけて考えることができる
- 保育全般に関する学びを、保育や子育ての現状を踏まえて、自分自身の保育に活用し、評価することができる

⑥ 福祉・養護



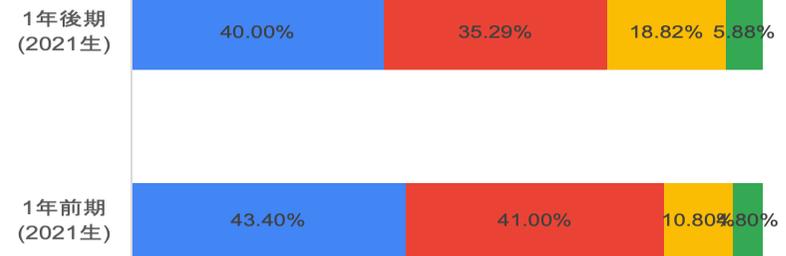
- 社会福祉についての知識は少ないが、学び、理解していきたい
- 社会福祉や社会的養護の基本的知識（理念や制度）を理解している
- 社会福祉や社会的養護の基本的知識に加えて、施設等でのサービス内容や利用者への支援方法について理解している
- 社会福祉や社会的養護の内容を理解し、各種福祉サービスや社会資源について説明することができる

⑦ 乳児・保健



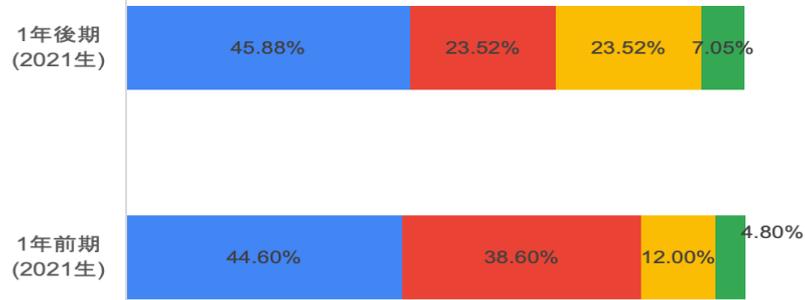
- 乳児の発達や、乳児への関わりのイメージは、何となく持っている
- 年齢や月齢ごとの発達段階に興味を持ち、それぞれの段階における保育内容について基本的な知識が身に付いている
- 乳児の発達や保育に関する保健的な観点について理解し、配慮することができる
- 乳児の発達を理解し、保育者として必要な援助の方法や技術を身に付け、保育における保健的な観点を踏まえた保育環境や援助ができる

⑧ 教職の意義・教育理論



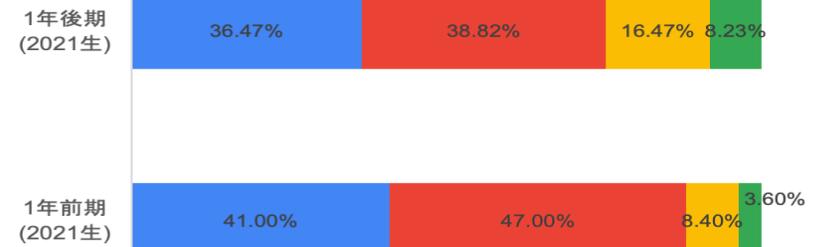
- 教育者としての意識はまだ低いが、教育について学ぼうとする意欲はある
- 教育という職業のあり方について知り、教育者・保育者として子どもと関わろうとする
- 教育についての思想や歴史についての基礎的知識を理解し、教育者・保育者として子どもと関わろうとする
- 教職や教育に関わる理論の基本を理解し、それに基づき教育実践をしようとする

⑨子ども理解



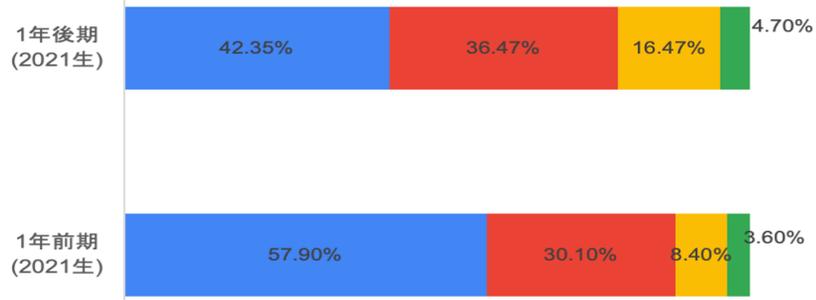
- 発達についての知識はまだ少ないが、学ぼうとする意欲はある
- 年齢ごとの発達段階について、基本的な知識を身につけている
- 発達段階に応じた関わりや支援を考え、ある程度実践することができる
- 一人ひとりの子どもの特性や発達に応じた関わりや支援を考え、ある程度実践することができる

⑩障がい



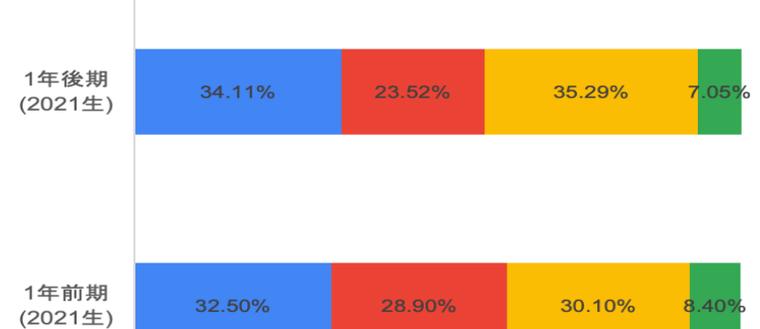
- 障がい 障害児・者と接することに不安はあるが、学ぼうとする意欲はある
- 障がい 障害についての知識はある程度身につけ、障害や障害児・者について少し興味や関心をもち始めている
- 障がい 障害についての基本的知識があり、支援の基本的な技術を実践することができる
- 障がい 障害についての知識があり、それをもとに、障害児・者に接したり、初歩的な支援をしたりすることができる

⑪教育実践

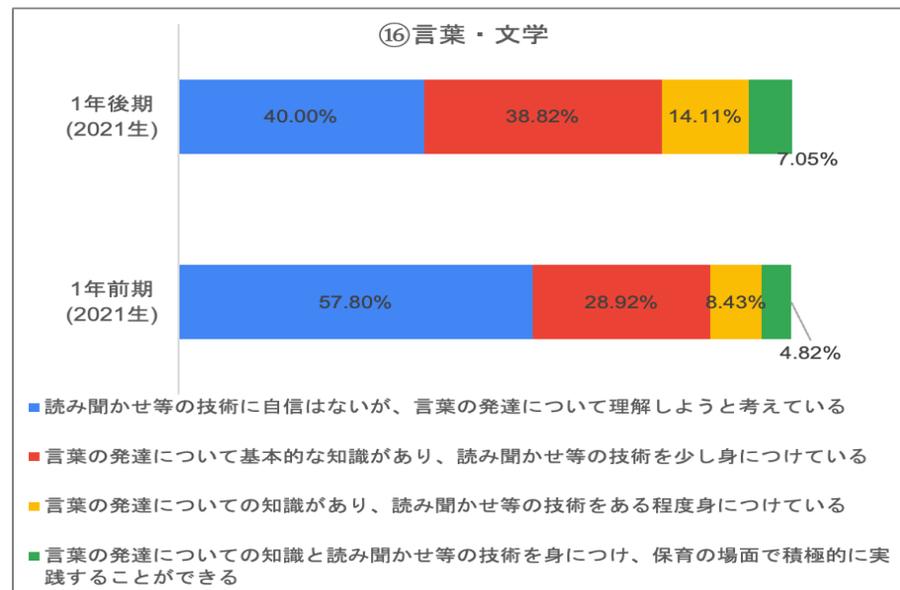
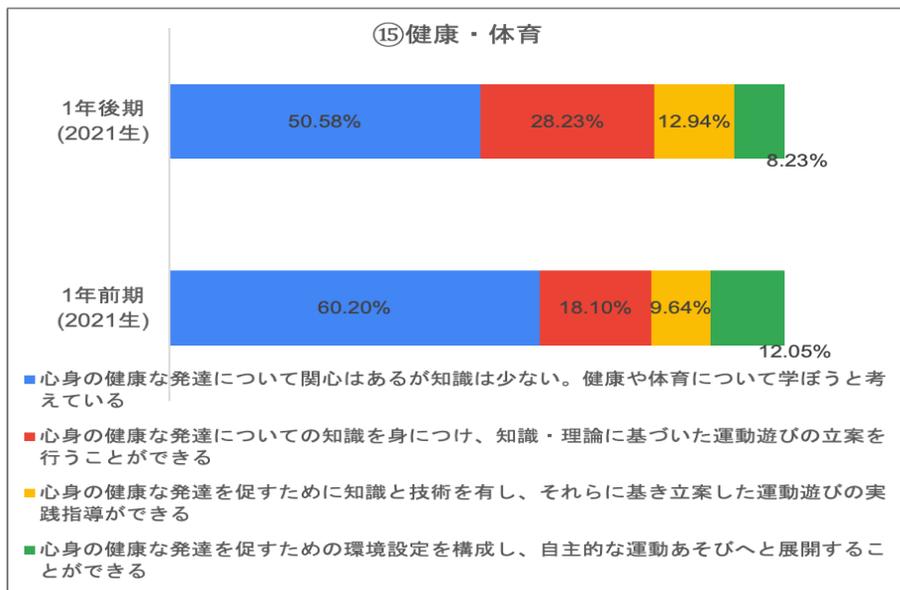
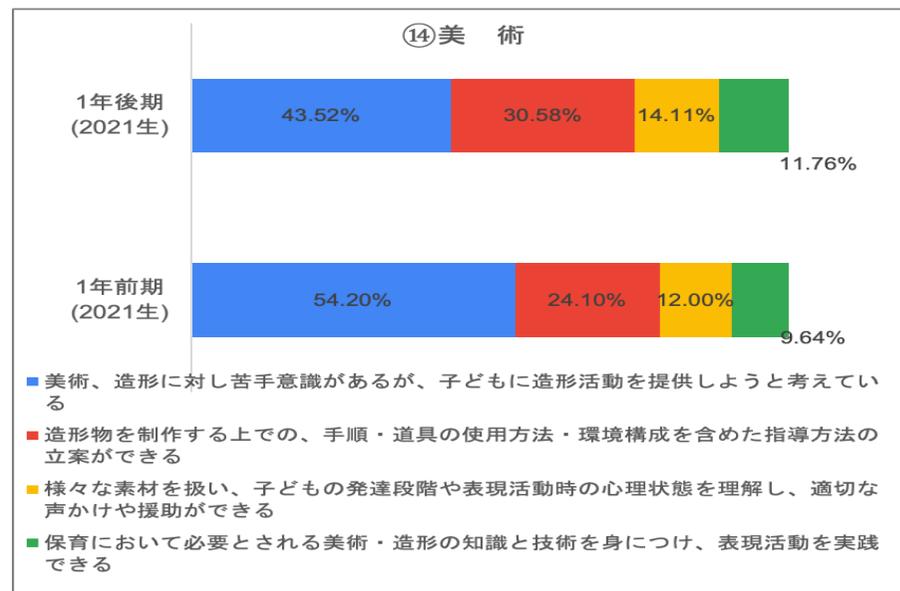
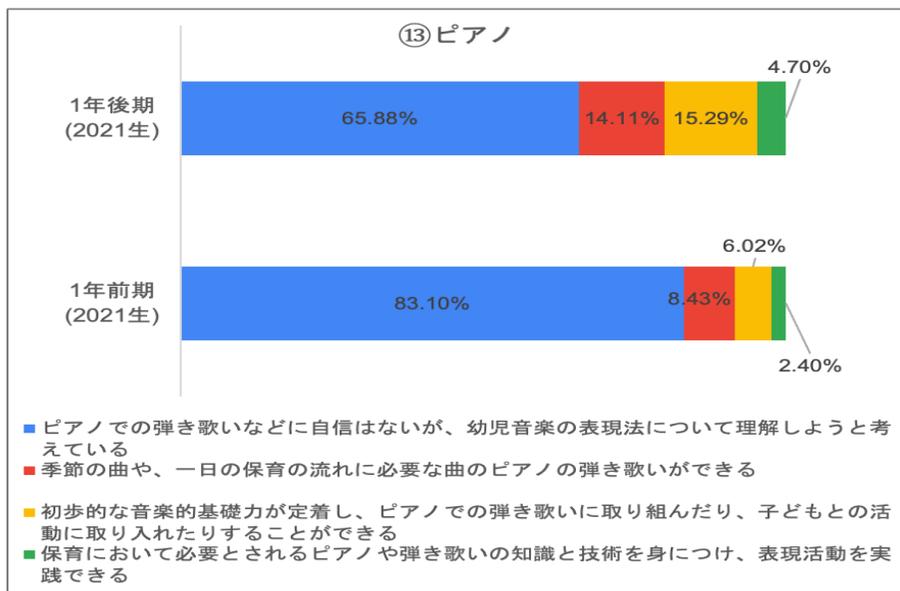


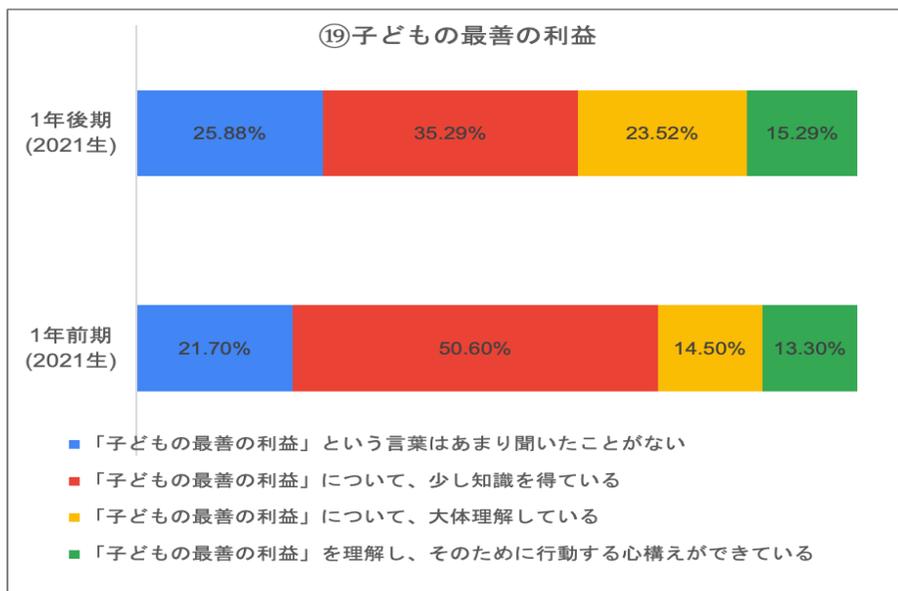
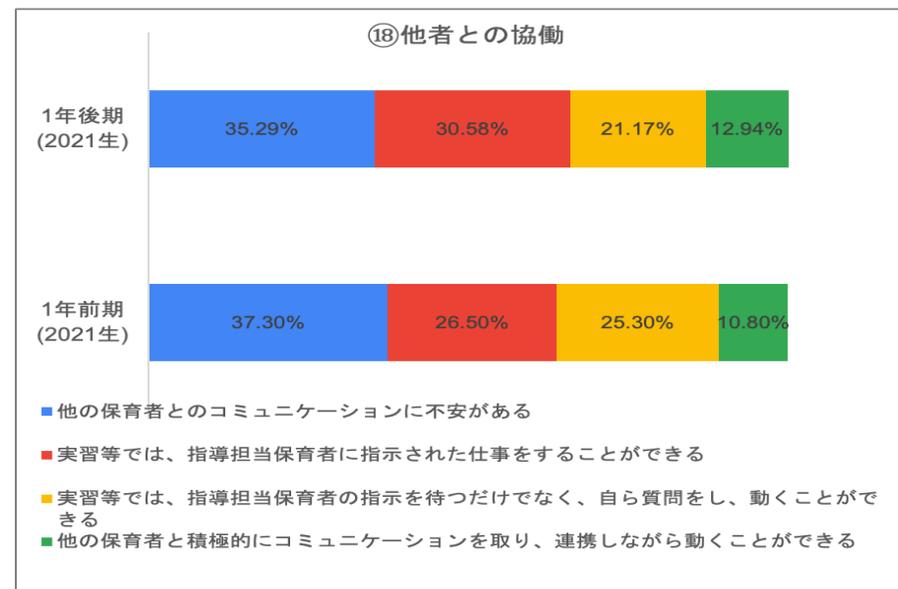
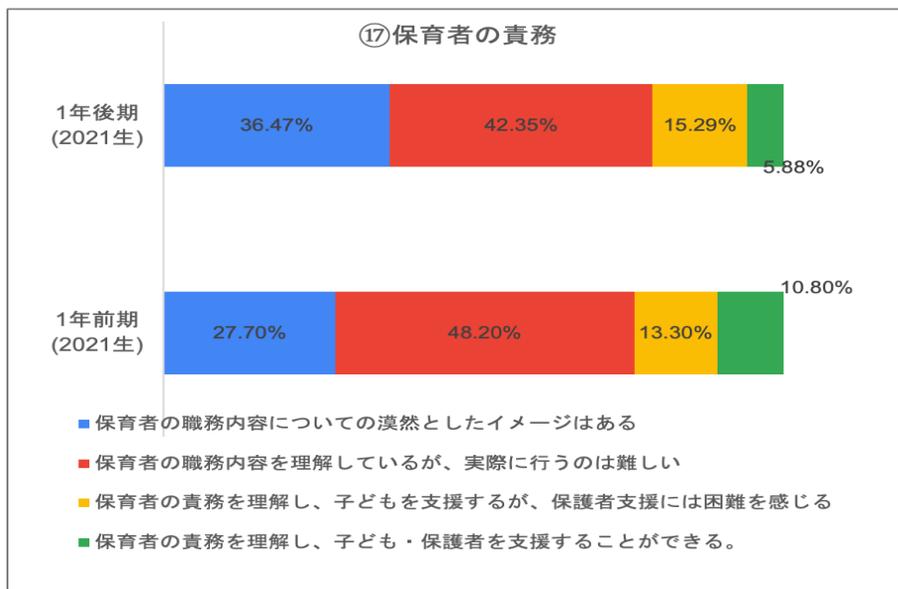
- 教育者として教育を実践する意識はまだ低い、様々なスキルを身につけていきたいと考えている
- 発声や表現、発達の段階に沿った指導や援助など、教育の実践的スキルの基礎を理解してきている
- 自分なりの教育実践スキルを理解し、それを生かした指導計画や環境構成を構想し、教育実践をしようとする
- 様々な教育の方法や、教育実践についての知識をもち、それらを活用しながら指導計画を作成して教育実践をしようとする

⑫音楽



- 音楽に関する知識や技術に自信はないが、学びたいという気持ちはある
- 音楽の基礎的知識を得たり、合唱の基礎を理解したりすることができている
- 音楽の面白さや楽しさを理解し、子どもとの関わりや、保育実践とつなげて考えることができる
- 子どもが音楽の楽しさを実感できる保育や教育を構想し、実践しようとする事ができる





4. 介護福祉学科について

(1)結果の概要

介護福祉学科のディプロマポリシーは表1の通りである。

表1 介護福祉学科のディプロマポリシー

介護実践の基盤となる教養と総合的な判断力および豊かな人間性を身につけている。 1.あらゆる場面に汎用できる介護の知識と技術を有し、自立支援の観点から、身体的な支援だけではなく、心理的・社会的支援を展開できる能力を身につけている。 2.利用者や家族の援助のためのコミュニケーション能力、的確な記録・記述ができる能力及び介護過程を多職種協働チームにより展開できる能力を身につけている。 3.介護ニーズの複雑化・多様化・高度化に対応し、利用者や家族等のエンパワメントを重視した支援ができる。 4.生活の質の維持・向上の視点を持って、利用者の状態の変化に対応できる。

2021 年度入学生の評価の観点のうち、①がポリシーの「豊かな人間性」に対応し、②～⑯がポリシー 2～4 に対応している。評価の観点、各項目の評価基準、2021 年度生の 2 回に渡る調査の結果を 20～23 ページに、2021 年度生は 24～28 ページに示す。回収率は 100%（回答者は 1 年生 12 人、2 年生 20 人）であった。

(2) 検定の結果 (表 3)

1) 2021 年度生の結果

2021 年度生の 1 年次前期と 1 年次後期の結果において有意差が認められたのは、3 項目であった。

⑥ 社会のしくみと法制度 (p=0.0017)、⑧-3 生活支援技術(排泄) (p=0.0061)、 ⑧-4 生活支援技術(清潔と入浴) (p=0.0498)
--

2) 2020 年度生の結果

これまでの 4 回分の回答結果の推移について、1 年次終了時点と 2 年次終了 (卒業) 時点のそれぞれの 4 段階評価のうち、2 段階以上の回答をひとつにまとめて Fisher の正確検定を実施したところ、有意な差が認められたのは 6 項目であった。

②権利擁護 (p=0.0810)、④社会との関わりの理解 (p=0.0751)、⑤生活の場に応じた支援 (p=0.0270)、⑫医療的ケア (p=0.0208)、⑬老化・障害 (p=0.0751)、⑭コミュニケーション技術 (p=0.0188)
--

表2 フィッシャー検定の結果

	2020年度生 1年後期/ 2年後期		2021年度生 1年前期/ 1年後期
① 介護の基本能力		① 豊かな人間性	
② 権利擁護	+	② 人間の尊厳と自立	
③ 心と身体を理解		③ 権利擁護	
④ 社会との関わりを理解	+	④ 多様な生活者の理解	
⑤ 生活の場に応じた支援	*	⑤ 生活者を取り巻く環境	
⑥ 制度に基づいた支援		⑥ 社会のしくみと法制度	**
⑦ 自立支援		⑦ 認知症の理解	
⑧ 移動		⑧-1生活支援技術(移動)	
⑨ 食事		⑧-2 生活支援技術(食事)	
⑩ 排泄		⑧-3生活支援技術(排泄)	**
⑪ 入浴・清潔		⑧-4生活支援技術(清潔と入浴)	*
⑫ 医療的ケア	*	⑨ 医療的ケア	
⑬ 老化・障害	+	⑩ 発達と老化の理解	
⑭ コミュニケーション技術	*	⑪ コミュニケーション	
⑮ アセスメント力		⑫ 介護過程の展開	
⑯ 介護計画		⑬ チームケア	
⑰ 協働する力			

* p<.05 ** p<.01 + .05<p<.10

(2)2021年度生のディプロマポリシーの検証

2020年度生以前の調査項目は、ディプロマポリシーを意識した内容としていないため、調査項目の変更を加えた2021年度生の1年次の前期から後期にわたる結果の推移から、ディプロマポリシーの観点の検証を行う。

まず、学科のディプロマポリシー「豊かな人間性」に関する回答には、評価段階1の“支援を必要とする人に対して、その気持ちに共感することができる”と、評価段階3の“支援が必要な人に対して、進んで支援しようとする”の割合が増加し、その分、評価段階4の“支援が必要な人のその人らしい生活を捉えた支援として、学んだ知識と技術を活用することができる”が減少した。

(3)教育活動の見直し

2021年度生が回答した学修の成果の調査の後期分では、全体的に、後期になって自己評価を厳しくする結果となった。介護の専門的知識・技術を問う項目で、自己評価を下げる傾向があり、評価段階1と2の増加、評価段階3と4の減少する回答が多く見受けられた。要因として考えられるのは、前回の調査後に行われた介護実習が挙げられ、介護現場での自己覚知が影響したものと思われる。詳細としては、「③権利擁護」についての問いでは、評価段階4の“権利擁護の視点を保ちながら、対象者の支援ができる”は前回は25.00%であったのに対し、今回は8.33%までに低下した。同様に「④多様な生活者の理解」においても、評価段階4の“生活者を、その人の在り方を受け入れながら、身体的・心理的・社会的に理解し支援に結びつけることができる”が

25.00%であったのに対し、今回は 8.33%までに低下した。しかし、自己評価を下げる傾向がありつつも、社会的理解の項目では評価段階 1 が減少し評価段階 2 以上が増加した。また生活支援技術の項目では評価段階 3 と 4 が増加する結果となり、限られた項目ではあるが自己評価が上向いた。詳細としては、社会的理解の項目の「⑤生活者を取り巻く環境」での評価段階 5 の“生活と社会のかかわりにおける、自助、互助、共助、公助について理解している”が、前回 58.33%もあったのに対し、今回は 25.00%までに減少し、評価段階 2 以上に転じた。同様に「⑥社会のしくみと法制度」では、評価段階 1 の“社会保障制度の基本的な考えとしくみや内容について理解している”は、前期には 83.33%もあったのに対し、今回は 16.67%までに減少し、そのぶんが評価段階 2 以上に転じている。生活支援技術の項目は総じて評価段階 4 が増加したが、とりわけ増加した項目の「⑧移動」は、評価段階 4 の“移動支援に関して、対象となる日常生活や社会生活を支援することができる”が前回 16.67%であったが、今回は 41.67%にまで増加した。1 年次に見られる評価段階の推移は、右肩上がりではないのは、前期に自己の評価が高かったものが、1 年次夏以降、自己を適正に評価できる客観的な評価視点が養われたものと思われる。これは、1 年次夏以降から始まる実習や、後期以降開講となる介護過程などの演習などの機会を通して獲得したものと推察される。これら 2021 年度生の一年次を振り返り、1 年次の教育活動を見直す点を挙げるなら、1 年次前期のうちにも学生が自己覚知できる機会を設けることと言えよう。

続いて、2020 年度生が回答した学修の成果のアンケートの後期分では、2 年間の学修の成果として、評価段階“4”を回答する割合が前回以前より増加する結果となった。

まず、「①介護を実践するための基本能力」では、評価段階 4 の“対象者の尊厳を保持しながら、自立を支援できる”を選択した学生は 40.00%とそれ以前の 2 倍に増加した。「③対象となる人を生活者として理解する能力について（その 1）」においても、評価段階 4 の“生活者をその人の今あるあり方を受け入れながら、身体的・心理的・社会的に理解することができる”の選択が 40.0%とそれ以前の約 2 倍に増加した。つづく「④対象となる人を生活者として理解する能力について（その 2）」においても、1 年後期、2 年前期と段階的に増加し、評価段階 4 の“生活者をとりまく環境を把握し、対象者の理解を深めることができる”の選択が 35.00%に及んだ。「⑤多様な環境や状況に対応した介護を実践する能力（その 1）」については、評価段階 4 が 20.00%と小幅の増加ながら、評価段階 3 の“生活の場や家族形態・状況を理解し、その場に適した介護

を指導のもとに実践できる”も増加し、この評価段階は1年次の前回比で2.5倍も増加した。こうした最終段階（2年次後期）での評価段階3と評価段階4の増加は、つづく「⑥多様な環境や状況に対応した介護を実践する能力（その1）」においても傾向として見られ、評価段階3の“高齢者福祉制度・介護保険制度・障害者福祉制度・権利擁護や個人情報保護などの基本的な考え方、各制度のしくみや内容について理解している”が25.00%に増加、評価段階4の“制度やサービスなどの社会資源を活用し、対象者を支援できる”も25.00%に増加した。一方で、「心身の状況に応じた介護を実践する能力について」（その1～4）の項目では、評価段階1もしくは2の増加がありつつも、評価段階4が増加した。また、（その6 医療的ケア）においては、評価段階2～4の喀痰吸引、経管栄養の理解が増加した。「介護過程を展開する実践能力」では、アセスメント力、介護計画を作成し実践につなげる能力の両方の問いに、評価段階4の増加とともに、ICFに関する評価段階2の割合も増加した。「⑩チームで働くための実践能力について」では、評価段階4の“チームの一員としての役割を自覚し、協働することができる”が40.00%にまで大きく増加した。つまり、知識・技術の習得だけでなく、それらを生かす実践能力が身についたことが示唆される。学修成果から教育活動を振り返ると、2年次に行われる実習や国試対策学習などが、各科目を横断した知識・技術を活用するため、実践能力の向上につながった可能性があり、今後の教育活動の見直しの参考になるものと推察される。

